

アジア・キリスト教・多元性 現代キリスト教思想研究会
第12号 2014年3月 39～58頁

明治期・内村鑑三における〈独立・自由・個〉の展開（１）

柴田真希都

はじめに¹

本稿はJ・バンダ、J=P・サルトル、E・W・サイードなどの知識人論²において展開された知識人をめぐる規範的言説を参照枠として、内村鑑三を近代社会一般における、普遍的かつ批判的「知識人」（intellectual）として立像していこうとする試みの一つに位置する。

内村鑑三はこれまで一般に、近代日本を代表する「思想家」あるいは「宗教家」として認知されることが多かったように思われる。それに対し、本稿では彼を「知識人」として理解しようと努める。それは筆者が、内村の同時代世俗社会においてもった意義を、独自の複合的な視座から再評価してみたいと思っていること、あるいは後代における、必ずしも思想・宗教を主たる生業としない人々へも及ぶ、彼の広範な影響・共鳴圏を読み解く、新たな説明枠組みを持ちたいと考えていることによる。

内村を近代の「知識人」として立像しようとすることは、むしろ、彼を日本の「思想家」あるいは「宗教家」として捉える従来の見地を否定するものではない。むしろ、そうした概念が含む専門性を核とした、社会・文化の一般的文脈に息づく彼の言論人としての特質や職責を、近代の普遍主義・西洋古典主義・アングロサクソニズム（とくにアメリカニズム³）といったいくつかの思想史的概念に接続し、そうした面からの理解をより深めていくことを念頭に置いた試みであることを予め注記しておきたい。

上記のような展望のもと、本論は、知識人を個人単位で把握しようとしたE・W・サイードの見解に注目することから始める。すなわち「知識人とは、あくまでも社会のなかで

¹ 本研究は平成25年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

² 筆者がここで念頭においているテキストは以下のとおり。

Benda, Julien, *La trahison des clercs : introduction d'André Lwoff : avant-propos d'Étiemble*, Paris, B. Grasset, 1975.

Said, Edward W., *Representations of the Intellectual: The 1993 Reith Lectures*, New York, Vintage Books, 1996.

J=P・サルトル『知識人の擁護』人文書院、1967年。

³ ここでいう「アメリカニズム」とは、R・N・ベラーらがA・トクヴィルの議論から抽出したアメリカニズムの三つの支柱（個人主義・共和主義・聖書主義）に依拠した概念として使用している。Robert N. Bellah, Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler, and Steven M. Tipton, *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, University of California Press, 1985.（島藺進・中村圭志訳『心の習慣——アメリカ個人主義のゆくえ』（みすず書房、1991年）を参照。

特殊な公的役割を担う個人であって、知識人は顔のない専門家に還元できない、つまり特定の職務をこなす有資格者階層に還元することはできない⁴」個人である、という見解にある。このサイドの知識人観に導かれて、明治期・内村鑑三の単独者としての実践と思索の足跡を再構成してみようとする。この場合、単独者という言葉は、サイドが言うように、階層や党派から離れて行動する個人を意味するのはいうまでもないが、孤独な生活や単独による仕事、といったことを必ずしも意味しない。自他において等しく単独であることを重んじる姿勢から始まり、単独者の連鎖によって、徐々に共同関係が発達していくという展開をも視野に入れた概念として用いる。その核となるのは、単独者の自覚のもとで責任ある社会的言動を選び取る精神である。

1 個に徹する —— 〈単独者〉としての軌跡

そこでまずは、公人・内村鑑三の単独者ぶりを整理してみたい⁵。

彼は札幌農学校を卒業した後（1881年）、開拓使御用掛につとめ、北海道の水産調査などにあたったが、そこでは独りで調査に出かける、ということが多かったようだ。共同研究が主流の今日の自然科学系の学会ではあまり考えられないが、彼が20代で発表したと現在確認されている農学論文は総て単独名義での発表である⁶。彼は独りで調査器具を携えて、田舎町の漁村に何日間も停留し、町の人々と懇意になって話を聴き、一方で自然を相手に観察し、スケッチし、データを集めたと見られる。

内村は渡米にあたっても単独であった。彼は人生問題の苦悩を打開するため、心機一転、私費で渡米したからである。そして彼の場合留学は結果論であって、事実上針路の不明確な日本脱出であった。

「米国理学士」という公的肩書きを持って日本に帰ってきた内村は、方々で教鞭をとった。彼の教育者としての資質は、小規模で、自分ひとりあたりの権限が比較的大きい私立学校や、単独で行うバイブル・スクールのようなところで存分に発揮された。

ところが、かの第一高等学校での「不敬事件」（1891年）が起こる。これは実際、彼が単独の判断をもって行った天皇親署への非低頭がきっかけであったが、実際のところは、彼の日頃の教育が展開するところの、個性的で批判精神あふれる米国流、あるいは〈耶蘇教的〉な教育姿勢が一部教師と生徒の反感をかっていたことに多くよるとみられる。「出る杭」としての単独者像がここに認められよう。

⁴ Said, *Representations of the Intellectual*, 11（大橋洋一訳『知識人とは何か』（初版14刷、平凡社、2011年、37頁）

⁵ 以下、内村鑑三の事跡については、鈴木範久『内村鑑三日録』（1-8巻、教文館、1993-1998年）の該当箇所を依拠する。

⁶ 『内村鑑三全集』1巻（岩波書店、1980年）3-110頁所収の、海洋生物学・漁業学関係の諸論稿を参照。なお、内村のテキストの引用は基本的にこの『全集』（以下、こう表記）による。

内村はその後、地方の教育職をいくつかこなしながら著作を書いた。彼は単独者の気概をもって仕事に取り組んだであろうが、そのような彼はいつも孤独であったわけではなく、彼の才能や気骨を買ってくれる人物も多かったのである。『六合雑誌』や『基督教新聞』だけでなく、やがては民友社の『国民之友』『国民新聞』に寄稿するようになり、作家として広く認知されるようになっていく。

しかし単独者の著作という点では、各種投稿論文よりも、初期の実存探求的な単行本『基督信徒の慰め』（1893年）や『求安録』（同年）そして *How I Became a Christian*（1895年）へと至る著述系統に光をあてる必要がある。これらの創作に底流するモチーフを一言でいえば、単独者による、救済を求める精神的軌跡の写實的再構成、といったところだろう。内村はこうした、日本文学には類例がなかったとされる⁷『告白』（アウグスチヌス）や『天路歷程』（バンヤン）風の著作で、キリスト教界あるいはキリスト教文学にその人ありと認められていく。彼は単独者の文筆の力でのみ世間と渡り合う作家となったのである。内村には西洋の詩人や文豪にまつわる独自の見解もあった。しかしながら彼はいわゆる創作文学者にならずに、ジャーナリスト寄りの活動を行った。彼の独立事情に多様な要素が去来したのは、やはり日清戦争後のジャーナリスト時代であったといつてよい。

請われて就職した朝報社では社員であり、英文欄の主筆であった（1897-98）。一国の主ではなかったが一城の主ではあったといえる。社主の黒岩涙香は内村に自由に書かせたため、彼は所属のない時と同じく単独者の面目を保った。ところが自由を拘束されない内村は、逆に一記者として、『万朝報』全体のキャンペーン（西本願寺法主の放蕩事件や台湾の高野判事罷免事件など）に積極的に同調したりもした。また、内村は助手に置かれた山県五十雄と友好な関係を築きながら、二人の手が入っているだろう文章でも、一貫して一人の人格の文章のように書いた。独立と自由を十分に与えられた内村が、自己の社内での職務や責任をも強く意識してふるまっていたことは注目に値する。

『東京独立雑誌』時代はこの点、さらに起伏に富んでいる。まずこの雑誌の誕生からして他者である山県五十雄の兄で『少年園』の発行者・山県悌三郎の出資によって可能となっていた。内村の独立の気概に感銘をうけた悌三郎が内村の生活費込みで月 100 円の援助の提供を申し入れたのである。内村がこの時、この申し出を受け入れたのは興味深い。この時期の彼は文筆によって社会を覚醒することに大きな期待を懐いていたので、『万朝報』においてつかんだ手応えを引き継いで、今度は一国の主となって、より自分のペースで独立の気焔を吐いてみたくなったのである。

⁷ 正宗白鳥は内村の『基督信徒の慰め』（1893年）を当時にあつては新企画であつた私小説と言う角度から読み込んでいる。正宗『内村鑑三』（細川書店、1949年）9-17頁を参照。*How I Became a Christian* のこういった側面については、佐伯彰一が自我の文学としての「聖の側の自伝」という観点から位置づけようとした。『日本人の自伝』（講談社学術文庫、1991年、51-91頁）を参照。

そこでいかにもその志そのままの雑誌名をもつ『東京独立雑誌』が誕生した(1898年)。先例としてアメリカの *Independent* 誌が想定された⁸。彼は表紙に出資者山県悌三郎の名前を「持主」として、主筆・内村の名前と併記した。後述するように、内村の認識においては精神の独立に即して経済の独立が伴っていないことは、余程気にかかる事だったに違いない。であるから、自己への戒めのためにも出資者の山県の名前をも表紙に明記したのだと思われる。雑誌の頒布が軌道にのり、1898年一杯で山県からの出資を打ち切ることができたとき、彼はその独立と自由の心底からの実感を雑誌に発表した⁹。

内村は『独立雑誌』の主筆であって、「東京独立雑誌社」の社長であった。彼は『独立雑誌』を個人雑誌にはしなかった。投稿者には独自に声をかけ手紙を書き、時には社員となってもらった。内村は、自身の思想にびたりと重ならない論稿でも自分の校閲を経て載せている。独立雑誌社には得意分野が異なる多様な人材が集まり、小冊子ながら総合雑誌、オピニオン雑誌の体裁が整えられた。若者中心の読者も、社員・寄稿者に共通して感じられる独立独歩の気風に胸を躍らせ、自己を鼓舞しつつ、愛読したのだと思われる。

その『独立雑誌』の廃刊に際しては、社内の複雑ないさかいの始終を伏せてしまい「共和的性質」と「独立」にこだわった末の別れを演出してみせたのは、諸事情を知る者には皮肉に読まれたことだろう¹⁰。

なお、彼がこの『独立雑誌』の編集・発行と併行して、私立の「女子独立学校」の校長を一時期勤めたことも一言しておく¹¹。彼の教育方針は、女子生徒に基礎教養と当時の女子的専門能力(裁縫など)を身に着けさせることによって、女子が家庭に入っても独立した立場を確保できるようにする、という目標が設定されていた。

『聖書之研究』の創刊(1900年)については、いろいろな困難や葛藤があった。この雑誌の発行形態に関しては独立雑誌時代の反省がいろいろ生かされていたと思われる。まず主筆の内村の執筆の比率が増加した。これは独立雑誌が月2回から3回出していたのに比べると月刊誌になったため、彼独りの仕事に余裕ができたという事情によるだろう。金銭的にも朝報社への復帰によって多少の余裕はあっただろうが、かつてのように社内に論客を迎え入れることはなかった。聖書研究社是一種の家内工業のような様相を呈していたよ

⁸ 古矢旬「『東京独立雑誌』とアメリカの雑誌界」(『内村鑑三全集』月報6、1981年)に、内村の読んだことが判明するアメリカの諸雑誌について紹介されている。

⁹ 「山県悌三郎君と別る」『全集』6巻、273頁。

¹⁰ 「独立雑誌の最後」(1900年、『全集』8巻、265-266頁)。内村は「独立雑誌」廃刊の情報を耳にして内村を見舞った黒岩涙香に、その雑誌社内の人員関係が「共和的特質」をもつ「共和の組織」であったと説明していた。彼が社内の紛争において、社員たちに罷免の宣告を食らったのもその「共和主義」が前提にあったため、と内村自身が理解しているのが面白い。周六手記「内村鑑三氏再来す」(『万朝報』明治33年、9月15日)を参照。内村における「共和主義」はその独立・自由な個人が平等な権利義務関係を前提に議論し合う関係、と理解されていたこともここに判明する。彼の「共和主義」志向の内実については、拙論「明治期・内村鑑三における共和主義の展開」(『公共研究』10(1)、千葉大学公共研究センター、2014年)を参照。

うである。内村を慕う学生たち（小山内薫や倉橋惣三などが有名）が編集や発送を手伝ったが住込みではなく、当該目的に適った労働のみが行われた。内村は彼らに存分に手当を出したが、事務員以外の身分として入社をさせることはなかった。独立雑誌時代の反省をふまえて、単独であることにより自覚的で敏感になっていたといえるかもしれない。

内村は自社の経営と並んで、朝報社のデスクでは一記者として、山県五十雄や斯波貞吉、幸徳秋水や堺利彦らと机を並べ切磋琢磨した。内村が朝報社内での共和的人間関係に触発されたところは少なくないと考えられる。後にそれで知られるところの非戦論なども、退社の時を同じくした幸徳や堺たちとの談話を通じて形成されてきたものとみてよいだろう。

独立という点で、もう一段新しい領域に進んだのは、内村が非戦論で朝報社を退社し、その後「理想団」の活動も自然、後退していった1905年以降である。少し遡ることになるが、彼は1900年、『独立雑誌』の読者を募った「夏期学校」を開き、直接教育の方面でも新境地を拓いていた。それをきっかけとして教育の対象となるような青年たちを集め、「独立倶楽部」なる団体を形成させ、共同の聖書研究やそれを基にした友誼を励ますことも行っていた。小山内薫や倉橋惣三、大賀一郎などはこの時期からの教え子であった。やがて志賀直哉もこれに参入した。北海道を拠点としていた有島武郎も東京に来た際にはここに顔を出した。会は参加者の「自主・独立」による運営が奨励されていたが、それは先生たる内村自身に当時あまり余裕がなかったこととも関係がある。自社雑誌の発行に加え、『万朝報』の記者活動も併行していたため、聖書の直接教育のための十分な準備を行う余力がまだなかったのであろう。

ところが、彼は朝報社を辞めたことで、その分余裕ができた。その代り、彼には充実した環境であった朝報社の記者室のような、「独立者」の共同の場が失われてしまった。その空白は内村の精神史を考えると、軽視されるべきではない。ここまでの歩みからもわかるように、内村の「独立」は「独立」者たちの共同においてこそ十二分に発揮される「独立」だったからである。内村は「独立者」どうしの、社会的共同の場の最たるものを失ってしまったことで、思想形成の過程に必要な人格の交流の機会を少なくしていたのである。

そのようなときに、内村は、従来、彼の周囲を中心に展開してきた信徒集団の育成により力を注ぐとともに——具体的には集会参加者の許容人数の増加が挙げられる——、地方各地に同一の精神をもつ信徒集団の発足を促すことに尽力し始めた。後々まで様々な形態と名称をもって存続・展開する「教友会」の形成（1905年）である。これは1900年以来の「独立倶楽部」や1901年に発足された紙上の教会『無教会』の統合的発展であったとみることができる。

この「教友会」は信徒集団の信仰的交流を核に、彼らの家庭、あるいは社会生活上の困難を話しあい慰藉しあう「講」のような役割を期待されていた。そこでは言論統制の監視

¹¹ 懇意にしていた友人の加藤トシ子が創立・経営していた学校であったが、彼女の病気にあ

下にある紙上の教会『無教会』では載せられなかったような、日露戦争以後の日本社会が直面する問題への、突き詰めた話し合いがもたれたようである¹²。内村はそのような目標から必然生まれやすい、人々のもたれ合いに警句を発するかのよう、「独立者の団体であれ」との注意を発した¹³。内村にとって必要だと思われたのは、独立できない人々の慰め合いの場ではなく、独立者どうしの感化・激励であり、信仰と智慧の言葉の交換であったといえる。

そういった独立の個人間の交流、強い個人の連鎖による困難の打開といった構想は内村の個人による、個人からはじまる社会改革の構想に最も具体的に結実している。この場合「個人」とは英語の *individual* が念頭にあったことに注意したい。内村は「個人」なる言葉を使用することで、各人の存在をこれ以上分割されえない社会的単位となるところの「靈魂」の独立、「靈魂」の自由を強く意識して把握している¹⁴。こうした、あくまで個人性に根を張ってそこに陣取り、社会構造改革や社会福祉の実現も、そこを基点にしてのみ成就可能であると唱えるのが、内村の一つの頑固なまでの主張になっている。その点、彼は靈魂の救済に配慮しない唯物無神論的な社会主義には始めから反対であった。また、靈魂の改造とともに社会の構造をも変えて行こうとする「二足の草鞋」を履くかのようなキリスト教社会主義¹⁵にも、その方法への楽観という点で部分的に批判的であったといえるだろう。

明治の内村における「個人の独立」に関していえば、以上のような足跡に加え、日露戦争後、明治 40 年前後の彼の内面的動揺の中に見られた、独立と自由への志向性の高まりを逸しては画竜点睛を欠く。

端的にいつて、彼はこの時期、従来の福音主義正統から、だいぶ自由主義神学よりの聖書解釈や信仰姿勢へ傾斜していたと見られる。その原因は、先に取り上げた、近代の自由主義的な聖書解釈法との格闘や、進化論的歴史観の動揺などにあった。内村において、前者は時代に遅れてやってきたものであり、後者は時代に先駆けてやってきたものだといえるだろう。従来、学問的な真理探究の成果に重い信頼を置き、同時に聖書の言葉による信仰の従順をも共に重視してきた彼にとって、その両者の衝突とそれによる精神の動揺はや

り、遺言でその経営を委ねられていた。「友人加藤トシ子逝く」（『全集』7 巻、159 頁）を参照。

¹² 斉藤宗次郎『恩師言』（教文館、1986 年）に、そうした内村と集会参加者の間に交わされた率直な会話の記録が多く載せられている。

¹³ 教友会設立にあたっては、その会則に「独立的生涯を送」ること、が参加の条件として入っていた。「教友会の設立」（『全集』13 巻、381 頁）を参照。

¹⁴ 「今日の困難」（『全集』6 巻、64 頁）を参照。

¹⁵ 「理想団」の定期晩餐会で、当時のキリスト教社会主義の代表者である安部磯雄が、個人とともに社会も改革する必要がある、と内村に反論したことがあった（堺利彦「理想団晩餐会の記」『万朝報』明治 35 年 4 月 3 日）。内村はその構想を素直に肯定しているものの、彼自身、靈魂の改革が先でなければならない、という点では彼らへの批判の姿勢は崩していない。なお、内村と安倍は夏に滞在する軽井沢の宿泊地が近所であり、その後も交流することがあったようだ。「日記」1923 年 8 月 5 日、7 日（『全集』34 巻、208 頁）を参照。

がては訪れるべきことであった。それが日露戦争後の精神の空白期において襲ってきたものと思われる。

内村はこの時期「外観はユニテリアン主義の人であつて、内容はオルソドックス主義の人¹⁶」を尊敬するといっているが、これは人間への理解や好感に関して言えば、実際に、内村が尊敬する人物一般にいえる在り方だったかもしれない。すなわち、社会的には革新と自由の探究者であつて、内心は深く超自然的な主義や信念に根付いているという個人である。彼においてこの時期、ホイットマンやソローなどへの共感が高まっていたこともそれに相関する。ドグマ一般への批判が苛烈になったのもこの頃であつた。

内村は『基督教世界』（1907年8月29日）に掲載されたアンケート「貴下自身の秋期に於ける活動の方面は如何」に対して、「Deeper, yet deeper into my own self.」と答えている。内容もさることながら、英語で端的に答えているところも、彼のこの時期のホイットマンやソロー的なものへの傾斜が伺い知られるところである。これには「自我煩悶」や「自然主義」といった時代精神との呼応——そういった影響の直接の当事者であつた青年たちとの交流にも多くよる——という性質もあるだろう。彼が直接関わる人々から話題をもらいつつ、自分の中で不動の信念として宿る「独立」や「自由」の問題を改めて発見しなおしたこと、人類的な視野を確保しながら、言葉を改めてそれを何度も強調してきたことは、以後の各章節で確認していくことになる。

2 自由・独立の宣伝者 ―経済的独立から信仰的独立へ

内村は自らの自由・独立にこだわっただけでなく、その最良の幸福さを宣伝しつづけた点でも、近代日本思想史において顕著な人物と見られる。しかしそれだけなら「独立自尊」で有名な福澤諭吉や自由民権運動の闘士たちとの思想的違いは見えてこない。内村の場合、個人が独立する、ということが一種、出来事的に理解されており、もし本当の独立が達成されれば、それは「改革」に等しいものと理解された。よって独立者は改革者であつて社会改革の単位であり、独立者の一致協力社会変革の勢力となる。そしてその勢力が必ずしも国家的・政治的権力を意味しなかったことに、自由民権運動期のキリスト教的思想家たちとの違いがあると言えるだろう。

内村は作家として全国的になった（＝民友社の雑誌に書き始めた）1894年、日清戦争に関連する諸論文を発表する合間に次のような文章を発表している。

独立を唱ふるは善し、然れども如何にして之を實行すべき乎、言ふを休めよ「汝我と共に独立する時は我も独立せん」と 独立とは「独り立つ」といふことなり、他人と共にあらでは立ち得ざる人は独立には非らざるなり、独立を望むものは先づ独りで立つべきなり、而して独立の人相集て始めて独立の教会もあり、独立の国家もあるなり、集合的

¹⁶ 『全集』15巻、163頁。

独立を望んで個人的独立を敢てせざるものは独立するとも独立の好結果に与かり得ざるなり、我等は厄介者と共に独立するを甚だ迷惑に感ずるなり、他人の独立する迄は依頼して他人の独立を待つて始めて独立せんとするものは何時迄待ても独立し得ざる人なり。

17

この文章は「独立論」と題されている。このしつこいまでの「独立」なる言葉の説明への試みは、「集合」よりも「独立」を先に、という主張が核となっている。そして特徴としては、何かからの、あるいは何のための「独立」という具体性に欠けていることが指摘されよう。現実問題に即した形で独立が語られる前に、精神の気概の問題、あるいは人間の内面での決定的な出来事として「独立」なる言葉が呈示されている点に注目したい。

さらに内村はこれに続けて「一致の来る時は何時か」（1894年）と題された文章を続ける。

是れ宗派的交渉の成りし時にあらざるなり、是れ神学的一致の来りし時に非ざるなり、真正の一致は吾人各々がその奉ずる所の主義を其儘実行する時にあり、約定上の一致は無益なり、我等をして之に信を置かしむる勿れ、実行上の一致のみが頼むに足るの一致なり、自身の主義を実行し得ざる人は人情の秘密を会得し得ざるが故に他を容るゝ雅量を有せず、実際に真面目に生涯の真味を味ひし人のみが互に共に働き得る人なり 宗教を以て茶話席の話題となすに止まるものは言語的捺印的の一致を計れよ、然れども二つとはなき此の生命を捨てても真理の為に尽さんと欲するものは斯の如き演劇的同盟に加はること能はざるなり、汝一致せんと欲する乎、先づ汝の主義を決行せよ、然らば其時汝は宇宙に存在する総ての誠実なる人と一致せしなり、一致の難は外が来て汝と一致せざるに非ずして汝の誠実ならざるにあり。¹⁸

内村はここで「独立者の一致」なる方向性を打ち出している。興味深いのは、彼が個人の独立にあれほど重きをおきながら、このような形である種の個人主義を回避しようとするのである。その一致のためには「人情の秘密を会得」する、といった経験による秘訣のようなものが仄めかされていた。真正の独立者は「他を容るゝ雅量」を持ち合わせている、ともされている。このような知識人活動の初期段階から、独立者どうしの共同一致、すなわち団体形成を視野に入れ、そのための方針を発表していたことを重要とみたい。

とはいえ、ここでも一致の具体的な形は明確でない。明確でないどころか、各々の主義に立脚した独立の個人の結果こそが一致である、といった論理すら打ち出している。言い換えれば、各人の主義思想の内容は問わないが、その特定の何かに実践的に踏みとどまる

¹⁷ 「時事雑評二三」『全集』3巻、102頁。

¹⁸ 同上、102-103頁。

ような「誠実」な人格が、個人間の共鳴版となって人々の一致が成立する、という筋書きともいえる。初期の内村の独立論はこのような意志的な、抽象的な真理の取り扱いに等しいものがあった。

それから20年後（1914年）、内村は「独立」や「自由」をより具体的な形でとらえることを行うようになる。そこでは「経済」という言葉が鍵になっていた。

経済上の独立は最上の独立ではない、其上に思想上の独立がある、信仰上の独立がある、我等は経済上の独立に達したればとて、敢て安心すべきでない、勿論誇るべきでない。

然れども経済上の独立はすべての独立の始めであつて、其基礎である、先づ経済的に独立ならずして、思想的にも信仰的にも真正の意味に於ての独立に達することは出来ない、経済は肉に関する事であるが、然し靈に及ぼす其感化は甚だ強大である、人が肉である間は彼は経済的に自由ならずして、其他の事に於て自由なることは出来ない。

故にすべて自由を愛する者は先づ第一に己が経済的独立を計つた、哲学者としてはスピノーザとシヨペンハウエル、文学者としてはエマソンとカーライル、美術家としてはレムブラント、彼等は自由を愛したるが故に経済的に独立であつた、哲学者カントの如きですら普露西政府より俸給を仰ぎし結果、幾回か彼の自由唱道を妨げられし事は人の能く知る所である、独立の無い所に自由は無い、而してすべての独立は経済的独立を以て始まるのである。¹⁹

これ以前の二〇年間、政治・社会・道徳・宗教の具体的な問題を、できるだけ「独立」の立場で取り扱おうとしてきた内村が、「独立」といえばまず始めに「経済」の独立を強調したのは、注目に値する。

彼は自身、金銭的な「不足」には多く悩まされてきたといえるが、それでも精神の独立のためには経済の不足は二の次の問題であった。彼がいう経済の独立とは、自由に満足した生活をしていけるだけの稼ぎがある、という意味ではない。ある経済的主体の下に置かれた結果、金銭的恩恵を受ける代わりに、自身の精神的・信仰的な営みにおける自由が制限されてしまうこと、それをもって内村は経済的に独立でない、といったのである。逆に経済的に独立であるという状況は、金銭の不足においても世俗の権力主体に帰属せずに、神へ直接頼ることから実現されるとも言われた。こういったことには、貧窮の危機において、どこからか必ず金銭のつてが（寄附であったり、出版物の印税であったり）思いもよらずに舞い込んできた内村自身の経験が下地になっていたと思われる。

¹⁹ 『全集』20巻、209-210頁。

彼の著作 *How I Became a Christian* が、翻訳されたドイツで予期せぬ好評を博し、少なからぬ印税が舞い込んできたのは 1905 年の暮れである。その後もそれは北欧・中欧各国語に訳されて読まれ、毎年、印税が入るようになっていた。1907 年の年初、彼は『聖書之研究』の発行について次のような談話を披露している。

余輩が又感謝に堪えない事は本誌が始より今日に至るまで経済的に絶対的独立を維持し来つたことである、本誌は未だ曾て一錢一厘の負債を以て年を越したことはない、然れども未だ曾て何れの教会、何れの伝道会社、何れの富める友にも寄附を請求したことはない²⁰

ここにはかの経済的独立と負債ゼロへの自負が認められよう²¹。自らの事業に対する、内村の以上のような理解と自負によるならば、経済的な実力者の庇護の下で、彼らの意向に一致する形で自らの言動を方向づけて行くことは、最も「独立でない」状態として非難されることになるだろう。滞米中に世話になった新島襄に対して、彼の死後、内村にあまり良い印象が残らなかった原因の一つに、こうした経済的独立、という要因があることも留意されてよい²²。

内村の場合、先の引用箇所でも表明されていたように、経済的な独立が達成されていないことは、金銭を給与する者の思想的な束縛下にいることである、と強く意識されていた。つまり経済上の援助・被援助の関係の存続は、思想形成やテキストの言葉の理解という真理探究の次元においても、本来中立・平衡であるべき姿勢が歪められ、有害となる、と認識されたのである。そこで彼のとった「知的自由を守りぬこうとする姿勢」の問題が浮上してくる。

3 知的自由を守り抜こうとする姿勢

1) 真理の観点から

サイードは知識人の一つの規範的性質として、あくまでその知的自由を守り抜こうとする姿勢を挙げている²³。その何から守り抜くかといえば、世俗の政治経済的権力——「いつも失敗する神々」(Gods that always fail) とサイードは表象する²⁴——にほかならない。

²⁰ 全集 14 巻、437 頁。

²¹ 戦後の代表的な内村言及者の一人・山本七平は、内村のこうした業績に自らの実存的な関心を高く寄せていることを表明している。『内村鑑三文明評論集(一)』(講談社学術文庫、1977 年、3-5 頁)

²² 「基督教徒の貴顕招待会」(1899 年、『全集』6 巻、418 頁)や「日記」(1921 年 9 月 27 日、『全集』33 巻、431 頁)を参照。新島襄は晩年、福澤諭吉と同じく、自らの学校・同志社に大学部を設立するため、政治・経済界の有力者を訪ね、寄附金を取り付けることに尽力していた。

²³ Said, *Representations of the Intellectual*, 17. (日本語訳、47 頁)

内村の場合も、「経済的独立」が「信仰的独立」よりも喫緊の課題として認められたのは、もし世俗の権威に経済的独立を売り渡せば、真理探究という、人間に許された自由な知的営為が阻害され、真理の確保やその十分な保持・表明が危うくなると理解されたからであろう。そのような「真理探究」と「独立」について、彼は次のようなまとまった見解を遺している。

真理は自己を支持すと云ふ(Truth supports itself)、故に真理は自づから独立なり、之に反して虚偽は自己を支持する能はず、故に自づから依頼するなり、独立は真理を証し、依頼は虚偽を証す、事物の真偽を験す標準にして之に優りて確実なるはなし。²⁵

これは非常に明快かつ簡潔な説明であるといつてよい。重要な働きをする概念が、「真理」と「虚偽」、あるいは「独立」と「依頼」という二つの対義語の間の対応関係で捉えられているのがわかる。内村においては、独立＝真理ではないが、独立こそが真理を保証する媒体なのであって、依頼の状態には結局虚偽が混入する、ということになるだろう。また、先ほどの引用（「一致の来る時は何時か」）とも合わせて考えてみると、虚偽の混じった状態は誠実でありえない、ということもできよう。依頼は虚偽を盛ることになり、不誠実さは真の共同一致を生まないという理論である。内村において、この構図を示す一つの典型が（というよりも、こういう構図を演繹したところの一つの最たる経験が、というべきか）、海外の宣教師団体に資金援助をうける日本のキリスト教会において認められていた²⁶。

夫の外国宣教師に依て伝へられし基督教なる者を見よ、其帰依者は教会と宣教師とに依頼せずして一雑誌を起す能はず、一教会を建つる能はず、而かも彼等は真理を伝ふると称す、然れども彼等の依頼は彼等の伝ふる真理の真理ならざるを証す、彼等は意力の欠乏を歎くを要せず、そは彼等と雖も若し真理を受けしならば、独り立て道を伝ふるを得べければなり、人をして独立ならしめざる宣教師の基督教は真の基督教ならざるを自証して余りあり。²⁷

これは一見論理的な筋の運びに見せているが、実際は真理ならば独立しているはずだ、依頼ならば虚偽だという、先の「真理は自己を支持す」というテーゼを敷衍しているにす

²⁴ Ibid.,121（日本語訳、191-192頁）

²⁵ 『全集』15巻、481頁。

²⁶ 特に同志社における外国（米国）宣教会社からの金銭的独立をめぐる動きに対して、内村は終始、辛辣な眼を向けていた。「策士の寄合＝同志社事件」（『全集』6巻、169頁）などを参照。

²⁷ 『全集』15巻、481頁。

ぎない。内村はこんなことを幾度も強調したくなるほど独立を重んじたのであり、独立を真理の系にあるものと見ていた、という点が確認されれば十分であろう。

こうした宣教師系キリスト教への批判は、過去に内村が手痛い目を見た「北越学館事件」（1888年）を想起させる。教育の場を通じて布教を意図する宣教師側と、その宣教師がもつ外国語教育力を安い雇用として当てにする日本人側、双方の間に発生する問題性を認識した、かの場合と感知した構図が等しいようである。

是は外国人の資金と宣教師との労働とを利用して彼等の称する精神的教育なるものを行はんと欲し、彼は日本人の共同を得て彼等の宗教を我が邦人の中に拵めんと欲す。彼に譲らん乎、文部省と国民との反対を奈何せん。是に譲らん乎、本国伝道会社の否認を奈何せん。断々乎として所信を実行するにあらざれば、此世は如何に面倒なる所なる哉。²⁸

自らの主義主張を侵されたくない一方、他者の主義主張を認める適度な寛容さをもつ、というのが内村の終始一貫する対人姿勢の原則であったといつてよい。その原則の徹底は、各個人の経済的独立に立脚した、知的自由の確立をも射程に収めるものであった。彼の場合、こうした対人姿勢の保持において、真理—誠実—独立—自由といった概念が連鎖的に確保されようとしていたのが特徴といえる。

2) 正義の観点から

「真理」と並んで、内村の採用する普遍的諸価値の体系を形作る中心的概念の一つは「正義」であろう。この「正義」とも「独立」や「自由」が決定的な形で関係づけられてきた形跡がある。

たとえば、内村が日清戦争を「義戦」として、熱心に支那を「懲誡」することを迫ったのは、そうしなければ朝鮮の「独立」が危ぶまれるから、という論拠であった。彼にとってそれ以前のような清の属国状態から朝鮮を「独立」させることこそが「正義」であったのだ。それゆえ支那が今後、周辺国に猛威をふるえない程度に叩いておくことは「正義の剣を以て彼れ積年の罪惡を問はん」とするに等しい、と開戦前期には思われていた²⁹。その開戦支持の大前提がぶれなかったからこそ、朝鮮を自らの勢力圏に組み込み、その独立を遠ざけただけでなく、支那分割の端緒にもなった日清戦争の行く末をみて、内村は日本の不正義を糾弾することになったのである³⁰。

²⁸ 『全集』6巻、169-170頁。

²⁹ 「日清戦争の目的如何」『全集』3巻、141頁。

³⁰ 「時勢の觀察」1896年、『全集』3巻、230頁。

日清戦争批判と同時期に始まった藩閥政府への苛烈な批判は、その日本の不正義批判の延長線上にある。それもあくまで内村の独立の立場でなされたことであつた。彼は自らの所信を達成させるため、政治家や政商に近づいたり離れたりしなかった³¹。その点では福沢諭吉や徳富蘇峰ら、有力出版社の創立者とは事情が異なる。また彼らとは違い「挙国一致」的な煽り方で、他者の行動を方向づけようという政治的な意思は日清戦後の内村には縁遠かつた。各個人の主義や思想への確かな立脚こそが誠実であり、一致共同の成立の基礎である、と彼が理解していたことからわかる。

それゆえ、内村の独立への意識は世俗権力からの個人の自由への意識とほぼ一体である。内村にとっては、彼自身苦い経験をし、その経験に明治年間を通して痛みを感じていたように³²、国民的統合すなわち、思想信条のレベルから社会的言動にまでわたる、国家の一なる教権体制への帰依への圧力から、自他の思想信条の自由とそれが基づく自由な生の経済的基盤をいかに確保させるか、といったこと、あるいは、権力に対していかにそれを承認させるのかといったことが、重要な対政治的課題になっていたといえる。

そうした課題を社会経済の領域で展開したのが、内村における「徳」と「富」との次のような関係把握であつた。

富と徳とを説明して見ますれば両者の関係は自ら分明であります、先づ個人の場合より両者の関係を話して見ませうか、正義を断行すれば金銭は溜らぬとは善く俗人の口に上る言葉であります、成程富といふものは道德に伴はない感じも致します、併し富は正義の為に用ふべき武器であつて肉慾の為に使ふべき筈のものではありません、これによりて心の独立を得、心の改革を得ますれば富は即ち富であります、富の為に徳を奪ひ去られては富は却て我を貧にする障魔と判定する外は有りません、富と徳とは一致せぬとの論は確に確に大間違であります、我が使用すべき筈の富に使はれて富は全く私の物ではありません、かゝる時我は全く無力無能の一器械たるに過ぎません³³

³¹ 大正期には例外もある。1924年、米国排日移民法の連邦議会通過をめぐる一連の抗議活動の間に、政友本党総裁の床次竹次郎と会ったことがその最たる例といえる。また、彼は足尾銅山事件をめぐる銅山側への抗議活動に関連して、田中正造や島田三郎と近い関係にあったことがある。しかしこの両例においても、内村の政治的宿志の達成のために権力に接触した、というよりは、各個別の事例の解決をめぐり協力関係をもったという程度に見るのが正しいように思われる。実際、当の問題への関わりが薄まれば、内村はそれらの人々からは疎遠となり、継続した提携関係は見られなくなった。

³² 内村は、かの不敬事件の結果、20年の間、国民的な疎外感を覚えさせられたと何度が口に出している（「完全なる自由」『全集』30巻、338頁、「故横井時雄君の為に弁ず」『全集』31巻、159頁など）。不敬事件は1891年（明治24年）に起こったことであるから、ほぼ明治の終了までを範囲にいれる20年間を意識していたとみてよい。その終わりが、三教会同（1912年）により、基督教界が国家体制に協力的に組み入れられる時期と符合しているのは偶然ではないだろう。

³³ 1903年、万朝報社主催の講演会で述べた「富と徳」なる演説の一部。『全集』11巻、290頁。

ここでは「富」が人々の「徳」を縛る、という先の経済的反独立状態が批判されている。そしてその逆の事態にあたるのが、「心の独立」＝「心の改革」に基礎づけられた「我が使用すべき富の富」の使用である。内村にとって正義の断行のために用いられる有効な手段こそが真に富とよばれるのであって、正義を行えば富がたまたぬ、といった理解はナンセンスなのである。ここには富＝moneyでなく、富＝resources（目的に適って有効化している資源）といった理解が認められよう。富 resources はそれによって「心の独立」＝「心の改革」のために用いられてこそ有益に「徳」の達成に資するのであって、精神生活を貧しくし、「器械」化するようでは「障魔」と呼ぶのがふさわしいのである。

4 個人について語る覚悟

1) 個人の力を説く

前章では、内村が個人の独立の価値を、真理や正義のそれと同じ系にあるものとして、時にはそれらと一体化するように語ってきた足跡を確認した。彼にとっては「独立」こそ「自由」の最適なパラフレーズであって、その独立の根拠は世俗権力の干渉を許さない、抽象的かつ普遍的な価値体系へと自らがコミットする、という内面的革新に根づくものであった。そのことは次のように調子高く述べられている。

独立とは必ずしも他の援助を絶つの謂ひにあらずして、自己の有する総ての実力を活用するの謂ひなり、人一人は小宇宙なり、彼の衷に殆んど無限の力の貯蔵さるゝあり、之を悉く活用せんか、彼一人の希望(正当なる)を充たし得るのみならず、彼は進で他を助け、以て尚ほ余りあるべきものなり、依頼阿従は素是れ自己の実力を知らざるより来るものなり、恰かも支那人朝鮮人等が彼等の邦土の富を知らずして徒らに貧弱を歎つが如し、吾人各自は一大富源なり、之を開鑿して吾人は欠乏を感じべき者にあらず、余輩は云ふ依頼は弱性にあらずして罪惡なりと、独立は美德にあらずして硬要的義務なりと。

34

内村はこのような信条的かつ社会哲学的次元で把握された「独立」の意義を大いに宣伝し、その独立への可能性を等しく秘めた「個人」を、随一重んずべき価値ある社会的単位として承認した。彼は『東京独立雑誌』時代にこんなことを言っている。

余輩は多く国家に就きて語らざるべし、そは是を口にする者は今や我国に充満して、余輩の特別に其の喧囂の声に加ふるの要なければなり。故に余輩は多く人一人づゝに就

³⁴ 『全集』6巻、309-310頁。

きて語らんと欲す。即ち偉大なる、高潔なる、正直なる、真面目なる個人の養成を助けんことを勉むべし。³⁵

このような主張は、知識人を個人という単位で把握しようとし、その知識人をあくまで個人に注目して語る存在であるとみた、本論冒頭のサイドの見解を再び想起させよう。

この時期（独立雑誌時代）の内村は、思想信条に関しては、宗旨を問わず、その信仰の誠実さや熱心さの程度において共通のものを見出して協力していこうとする姿勢が強かった。その姿勢には、仏教の改革の気性に富んだ青年達をも共鳴させた³⁶。朝報社再入社後の理想団活動、あるいは社会主義者らとの共闘もその一環とみることができる。彼にとってはあくまでも生きた人間個人が価値判断の際の基本単位なのであって、通常の間人間関係を阻害しない程度に存在している他者の私的な思想などというのはまず問題にならなかった。外面的な表れにおいて「真正に人たること」が反映されていればひとまず十分だったのである。

伝道精神あふれる内村像と、こういった事情は一見、調和しがたいかもしれない。彼の場合、伝道においても、聖書語句の読解とそれに関連づけられた自己の経験や思索の展開が主軸であって、他者の内面への押し入り、押し売りになることは、人格の尊重という点でも、また教えの尊さという点からも拒絶される傾向にあった。内村が何らかの理由で去りゆく弟子らを強硬に止めようとはしなかったのは、こういった方面への意識があったからであろう。

独立した個人の高い可能性への配慮をもった内村は、「独立的生涯」の鼓吹者であり、自らそういった人物の「代弁者」かつ養成者たろうとした。その際、繰り返し確認しておくべきは、これが個人的生活の充実の範囲にとどまらずに、国民の一人として、国家の独断的な動きを規制するところの普遍性への射程をもって語られたということである。

余輩は日本国の一小民なり、而して一小民として余輩は国民の最大多数を占むる小民の心を語るを得るなり、余輩は彼等の代弁者たるを得るなり、時には彼等の戦士たるを得るなり、彼等の悲鳴を伝へ、彼らの憂愁を宣べ、彼等も亦天の許を得て此地に存在するものなることを語り得るなり。³⁷

³⁵ 『全集』6巻、272頁。

³⁶ とくに清沢満之の弟子・暁烏敏が内村の熱心な読者であったことは知られている。清沢の『精神界』発行への『聖書之研究』の刺激についても推測されるところである。暁烏敏「内村鑑三先生」（『中外日報』1947年7月8日、鈴木範久編『内村鑑三を語る』岩波書店、1990年、252-253頁）を参照。

³⁷ 『全集』6巻、296頁。

吾人は古今の大著に接して其幽と玄とを吾人の同志に頒つを得るなり³⁸

余輩は国を作る能はず、然れど努めて人を作るに難からず、余輩は軍隊を編制し能はざるも、高尚強健なる意志を有する個人を作り得るなり、而して若し人ありて国家あり軍隊ありとするならば（余輩は爾か信ずるなり）余輩の事業も亦全く国家建設に関係なきものとは信ずる能はざるなり。³⁹

社会に不満をもつ中層以下の青年たちの支持を多く取りつけた内村ではあったが、彼は依然、井上哲次郎の弟子・高山樗牛らによって、その非・国家中心主義や、日本を特別扱いしない世界主義を批判されていた⁴⁰。そこで、内村が自身を「一小民」と把握し、その小民の心の「代弁者」として自らを登場させるのは、彼の平民指導者、改革者的な気概による見事な自己演出であっただろう。ここで「小民」と卑下されて表現されたところの、「高尚強健なる意志を有する」個人の誕生こそが、「国家建設」の唯一盤石な基礎であり、内村の静かなる革命成就への最短経路とされたのである。「人ありて国家あり」という彼の見通しは、その主導者たる意欲の発露でもあったと考えられる。

2) 偉人を語る

内村が、個人のみを唯一徹底して語るべき価値単位として認識し、その独立と自由の生涯こそが国家・同胞への最大かつ真正の貢献であると訴えていたことは、彼が折にふれて言及した「偉人論」においてより一層明確に読者に伝えられたものと考えられる。

偉人論や伝記の類は、明治中後期に一貫して人気のあった一つの文学ジャンルであったといつてよい。その潮流を強く後押ししたのは、徳富蘇峰の民友社の出版物やその周辺に位置する史論家たちの働きであったとみてよいだろう⁴¹。民友社刊行物を通じて全国的な作家となった内村も、思想的にはその潮流の一角から出発したとみなされうるかもしれない。

しかし彼は蘇峰・民友社に関係する以前から、歴史ものの一分野としての偉人・伝記ものを少なからず認めていた。民友社に関わる以前、すなわち 1893 年以前の著作目録を確認すると、時事問題に積極的に発言する以前の内村の一つの得意な文学ジャンルが、作家論

³⁸ 同上、297 頁。

³⁹ 同上。

⁴⁰ 高山樗牛「基督教徒の非国家主義」（『太陽』3 巻 11 号、1897 年 6 月 5 日）、同「内村鑑三君に与ふ（開書）」（『太陽』第 4 巻、22 号、1898 年 11 月 5 日）。

⁴¹ 明治 20 年代後半、北村透谷、国木田独步、徳富蘆花、宮崎湖処子らが執筆した「十二文豪」シリーズが有名。民友社は社長の蘇峰その人を始め、山路愛山、竹越三又、人見一太郎など、日本や欧米の歴史ものに高い関心を示し、その概説本を多く発行したことで国民的な業績をあげていた。

やそれと隣り合わせの人物論・偉人論であったことがよくわかる。具体的にはダンテやゲーテを皮切りに、1892年に記念年を迎えたコロンブスなど世界史的大物の名前が目につく。その他にも、内村が交流をもった人物の追悼記事や回想記事、あるいは友人についてなど、人物論が充実している。

彼が偉人について語るのを好んだのは、人間の価値は、その個々の思想にではなく、生涯の全体的な歩みにおいて判定される、と理解されていたことによると思われる。というのは、彼の偉人論は具体的なエピソードに満たされており、そのエピソードからその人格のもつ歴史的あるいは倫理的な価値が導出される、というのが常套であって、その人物の作品・テキストの個別具体的な検討や評価は二義的であったからである。彼にとっては、どんな専門のどんな作品を遺した人物であれ、作品やその専門における貢献以上に、特殊具体的なエピソードに代表される、高潔な人格こそが目を引かれる出来事であったかのようである。初期の代表作『後世の最大遺物』⁴²も基本的にはこういった人間理解に導かれた偉人論的人生理解を中核としている。

内村が各種の偉人論という点でも需要のある作家であったことは、方々で既に指摘されていることである。例えば、代表作「詩人ワルト・ホキツトマン」（1909年）が、普段は内村の雑誌を読まない層にもよく浸透していたことについては亀井俊介の指摘がある⁴³。独特の魅力ある聖書研究に加えて、歴史上の人物を興味深く語ることのできる作家という点でも、内村の公的役割は認められていたようだ。

そのような偉人論の書き手・内村が、いかに対象を選択し、その対象の中の特定の要素を選定し、強調して描いていたのか、という点がここでの関心事となる。そこで、彼の偉人論の本格的なものの嚆矢であったコロンブス論から、彼が偉人・英雄に関する何ほどの知識を、同時代の平民生活へと結びつけようとした企画の特色を探ってみたいと考える。

ここで取り上げるテキストは「コロンブスの行績」（『六合雑誌』142号、1892年）である。この年はコロンブスの新大陸発見から丸400年にあたり、欧米ではコロンブス再評価の機運が高まっていた。内村が読んでいた諸英文雑誌でもコロンブスに関する講演筆記や特集などが組まれたことだろう。内村がコロンブスをどういう意図の下、人々に紹介しようとするのかは、この論文の冒頭の言葉がよく表明している。

英傑は彼の時代の代表者にしてその最美の顕象なり、コロムブスは十五世紀の花なり果なり、此著しき歴史上の期限を知て、始めてコロムブスなる驚くべき人物を知るを得べく、コロムブスを知て十五世紀の希望と精神とを窺ひ知るを得るなり

⁴² その下地となった講演は1894年になされ、同年の『湖畔論集』（原田章吉編、十字屋）に収録された。内村鑑三名義での出版は1897年である。このテキストのもった広い講読範囲とその思想史的影響については鈴木範久『近代のバイブル―後世への最大遺物を読む』（教文館、2011年）を参照。

⁴³ 亀井俊介『内村鑑三』（中央公論社、1977年）196頁。

歴史家は千四百九十二年十月十二日コロンブス西大陸発見の日を以て中古時代の終結と認め近世時代の創始となせり、コロンブスは千四百三十五年(?)に生れ千五百六年に死せり、即ち彼は中古時代に生れて近世時代に入て死せり、人類は彼に依て中古を脱し近世に進入せり、宗教上の迷信、思想の束縛、封建時代は彼と共に死し、合理的宗教、自由思想、立憲政治は彼と共に生れたり、シーザルは羅馬帝国を建立しシヤーレマンは仏独伊三国の基礎を定めたり、コロンブスはルーテルに優りコロムウエル、ワシントンに秀で新世界を発見すると同時に全地球を改造せり、若し英傑は宇宙の共有物なりとせばコロンブスは其最も貴重なるものなり⁴⁴

この文面から判明するように、内村は目下の人物を生んだ時代背景や歴史的潮流をまず考慮する。そうした目配りは確かに学問的である。しかし、彼はその盤石な舞台の上で演ずる主人公を激賞する。まるで世界歴史における最高の人物であると断言するかのような調子で、これから述べようとする人物を読者に推薦し印象づける。「世界」「地球」「宇宙」といった絶対語を恐れもなく畳み掛けて使用している。

ここに補足できるのは、内村がその都度取り上げる人物に最大限の評価を呈している時は、その文脈と評価点に注意して読む必要がある、ということである。コロンブスならコロンブスに、クロムウエルならクロムウエルに、それぞれ最大の評価が与えられる文脈が設定されている上での叙述なのである。逆にそれ以外のところではコロンブスもクロムウエルもしっかり相対化されており、時に厳しく批判されもすることになる。

ではなぜ、そうした取り上げる対象に最大級の評価が与えられる人物論を書いているのか。それには内村が基本的には、読者の人格の陶冶に資するために人物論を書こうとした、という理由が挙げられる。内村のホイットマン論において、ホイットマンの人格の全体的な輪郭が取り上げられていない（例えばその性的な表現などは無視されている）ことなどもここから説明されよう⁴⁵。読者に対して何を伝えるべきかという観点から、彼が対象の性質を取捨選択したり、拡大縮小を施したりする、という作為こそが彼の偉人論の注目すべきところとなる。

このことを逆にみれば、内村にとって特定の歴史的人物を延々と批判する類の文章は、公にする必要のないものであった、ともいえよう。人物批判は同時代の権力者を対象に、皮肉やユーモアといった修辞交じりに行う類のものが適当であり、歴史的人物については基本、人々にその人物の美点を提示し、それに自らも連なることを推奨するために書くのである。ここには学的公平さ以上のものが働いている。

またそこにはロマン主義好みの孤高の人物、悲劇的な、忍耐の人物として偉人を紹介しようとする誘因も働いているように思われる。「古俗に従ひ時勢の潮流に^{うか}びて進むは凡

⁴⁴ 『全集』1巻、312頁。

⁴⁵ 内村のホイットマン論の特徴については、亀井前掲『内村鑑三』178-197頁を参照。

人の事業なり⁴⁶」といった言葉に顕れているように、内村にとって偉人は凡人の対義語であった。しかし偉人は凡人と必ずしも決定的に違う人物でなく、個人の心がけ次第で、偉人の業績は無理でも、偉人と同じ精神を獲得することは可能とされる。『後世への最大遺物』他、内村の文章が、こういう精神の理想主義的な高邁さによって、19世紀末のロマン主義思潮に何ほどか身を浸していた青年の支持を集めたということは不思議ではない。

内村の偉人論の特色は、初めは通り一遍の人物伝に見えたものが、個人の「自由」「独立」などの思想史的な諸価値を挟むことによって、「偉大なる平民」の物語へと転換されていくことにある。

内村は一般的には偉人と呼ばれる境遇にない、名もよく知られていない人物を取り上げて、彼らに偉人の魂を見いだすことを得意とした。それだけでなく、偉人の魂をもった当の人間が、あえて平民的な境遇に止まり活動することを顕彰する。そこに彼の反権威主義や強い個人の礼讃傾向が浮かび上がり、逆説的精神が伸びやかに発揮されて、読む側に新鮮な感覚を与えたことが想像される。

それは例えば次のような文章に現れている。これはかつて内村のところで女中として働いていた高橋ツサ子が、明治末期（1911年）に、郷里でひっそり早逝した時、彼がその弔辞として述べた言葉である。

皆様は此女を以てたゞ耶蘇教を信ずる頑固なるツマラナイ女であつたと思はるゝ乎も知れません、然し、私は思ひます、若し世が世ならば高橋ツサ子は実にエライ女であると云はれて世に尊まれたのであります、彼女は今の日本人に解せらるゝには余りにエラクありました、彼女の理想は欧米人に聞かしても決して耻かしくない者であります、私は信じます、今より百年の後、日本人の思想が今日よりも遙かに進歩した暁には、この花巻の人等は「我等の中に高橋ツサ子なる高潔なる女傑ありたり」と云ひて天下に誇るでありませうと、ツサ子はまことに是れぞと云ふ社会的大事業を成しませんでした、然し彼女は社会を其根底より改めんとしました、彼女は先づ自己を改めました、而して後に家を、而して後に花巻の町を、而して後に日本をと彼女は計画したのであります、彼女は彼女の理想の余りに高きが故に早く仆れたのであります、彼女の失敗は彼女の無能の故ではありません、彼女の生存せし社会の不完全なる故であります、彼女は此社会を救はんとて、之と闘つて、不撓不屈、終に彼女の主義のために仆れたのであります⁴⁷

ここでは内村が名も知られぬ個人の、しかも社会的には弱小者でしかない、地方出身の独身の若い女の身の上にいかに大きな「偉人」の精神を見届けていたかが表明されている。内村が、当時にあつては社会的弱者の極みのような人物を取り上げて、「日本人」一般の

⁴⁶ 『全集』1巻、315頁。

⁴⁷ 「高橋ツサ子」1912年、『全集』19巻、24-25頁。

価値観、あるいは「日本人」全体の集合に対比するかのようには彼女を際立たせて顕彰していること、そこに時代と文化への強い批判精神の発露を認めることができよう。

そのような一見非対称な個と全体の構図が成り立つ根拠は「欧米人に聞かしても決して恥ずかしくない」こと、すなわち、個人における人類的・普遍的諸価値の抱懷にあった。逆に言えば、そういったことが当時の日本（この場合とくに「花巻」の風土）で不足していることへの強い批判をもつがために、当の女を欧米＝普遍に繋ぎ合わせたり、100年後の思想的に進歩した日本につなげたりすることになったのである。

内村による所属を問わない個人への期待、あるいは偉人の魂を宿した平民への期待は、同時代の日本文化に根強い人間観への強い反発の精神の表現ともなったことが重要である。彼はあくまで長期的な視野の下で、いくぶんロマン的な歴史理解と、より一層古典的な人間理解を盛り込んだ人物論をいくつも書き残した。そこで彼がもっとも心がけたことは、当の人物が、生きた時代や地域の文化に制限されて十分に発揮できずに終わったところの精神の偉大さ、あるいはその個人の魂が直ちにつながるところの普遍的諸価値の重みを指示することであり、その挫折の過程で表明された強い人格の個性を、包人類的な視野のもとで生き生きと描きだすことであつた。

(続く)

(しばた・まきと 日本学術振興会特別研究員 国際基督教大学)